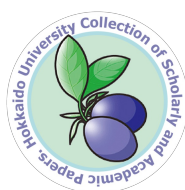




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	形式名詞に関わるモダリティ形式の否定形について：「ものだ」「ことだ」「わけだ」を中心に
Author(s)	張, 力丹
Citation	研究論集, 24, 205 (左) -218 (左)
Issue Date	2025-01-24
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.24.l205
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94039
Type	departmental bulletin paper
File Information	13_rjgshhs_24_p205-218_l.pdf



形式名詞に関わるモダリティ形式の否定形について

—「ものだ」「ことだ」「わけだ」を中心に—

張 力 丹

要 旨

本稿は、モダリティ助動詞の「ものだ」「ことだ」「わけだ」の否定表現を研究対象とし、その否定形の形態と形成の経緯、およびそれらを否定形として認定する基準について論じたものである。また、それぞれの否定形と、肯定形と意味的に対になる「ないものだ」「ないことだ」「ないわけだ」との間の関係性も明らかにした。

1. はじめに

形式名詞に関わるモダリティ形式として、「ものだ」「ことだ」「わけだ」がよく挙げられる。しかし、その否定表現、および否定表現一般がモダリティ形式と認められるかどうかというところについては、十分に検討されていないようである。本稿は「ものだ」「ことだ」「わけだ」の否定表現を対象とし、それぞれの否定形を明らかにした上で、三者間の相違点も突き止める。

2. 先行研究および問題提起

本節では「ものだ」「ことだ」「わけだ」の否定形に関する先行研究をそれぞれ整理しながら、問題点を提起する。

2.1 「ものだ」の否定形に関する先行研究

「ものだ」の否定形式は「ものではない」とであるとされている（益岡 2000, 日本語記述文法研究会編 2003）。

ア) ものだ —— ものではない

日常会話において、発話場面や話し手の品位などにより、「ものではない」「ものじゃない」「もんじゃない」「もんじゃねえ」といったパターンがある。改まった場面や敬意を払うべき関係、自分の品格を示したい場合、「ものではない」と「ものじゃない」が多用されるのに対して、くだけた場面や家族、友達のような敬意を払わなくて済む関係であれば、「もんじゃない」「もんじゃねえ」がよく使われる。

益岡（2000）では、「ものではない」は所与の事態の成立が望ましくないという意味を表し、対話文では動作の主体は通常2人称であるとされている。ただし、1人称が動作主体にもなりうる。それは話し手の後悔の気持ちを表す文脈で用いられると益岡は指摘している。日本語記述文法研究会編（2003）は「ものではない」が聞き手が実行した行為に不満を表明し、非難する際に用いられやすいと提示している。

（1） そう悪口を言うもんじゃない。

（五木寛之「内灘夫人」，益岡（2000）：124による，下線は筆者）

（2） でその時にあ本当にできないって言うもんじゃないなという風に感じました。

（CSJ）

しかし、これらの先行研究ではモダリティ助動詞として働いている「ものだ」の否定形がなぜ「ものではない」になったのか、その形態論的な経緯がはっきりしていない。加えて、「ものだ」には、「男の子は泣かないものだ」のような、「ないものだ」という否定を含む形式も存在している。その「ないものだ」と「ものではない」とはどのような関係があるのかも先行研究においてあまり論じられていないようである。

2.2 「ことだ」の否定形に関する先行研究

「ことだ」の否定形式は「ことはない」であると指摘されている（寺村 1984，日本語記述文法研究会編 2003）。

ロ) ことだ —— ことはない

寺村（1984）は、コピュラと切り離して文中で補語となったり、題目語となったりすることができないような「ことだ」をムードの助動詞とみなしている。〈忠告・勧告〉をする場合、否定で「ことではない」とならず、「ことはない」となる一方、〈一種の感嘆文的な表現〉をするとき、否定形はないとも指摘している（寺村 1984：296-297）。

日本語記述文法研究会編（2003）は、助言・忠告の「ことだ」に関して、否定を含む形には、「ないことだ」と「こと（は）ない」があり、「ことではない」という形にはならないと述べた上で、「ないことだ」と「こと（は）ない」との相違点についても言及している。「ないことだ」は、聞き手が目的を達成するため、悪い状況に陥ったりしないためには、その行為を実行しないことが必要、重要だという話し手の判断を示す。「こと（は）ない」は、行為の実行が不必要だという話し手の判断を示す」（日本語記述文法研究会編 2003：226）という違いである。

しかし、モダリティ助動詞の「ことだ」の否定形は確実に「ことはない」になるのだろうか、なぜ「ことではない」は「ことだ」の否定形にならないのか、という疑問が残る。

2.3 「わけだ」の否定形に関する先行研究

「わけだ」の否定形式は以下で示した3通りがあると指摘されている（寺村 1984）。

- ハ) わけだ —— 1) わけが（は）ない
- 2) わけではない
- 3) わけにはいかない

三者間の相違について、寺村（1984）は以下のように記している¹。

1) わけが（は）ない

$P \rightarrow Q$ （ P だから当然 Q ）という「わけだ」の中心的な意味を背景にして、「 Q という命題を成り立たせるような P はどこにもない」という言い方のつづまった形と言って良いが、実際はそれよりもっと強く Q を否定する、積極的に否定する傾きが大きく、内実は「 Q ではないと考える根拠たる P が充分ある」というくらいの感じであり、「はずがない」と言い換えられる。

2) わけではない

自分が P と言ったから、聞き手が $P \rightarrow Q$ という推論をする、その推論を否定する、というプロセスである。否定の対象である $P \rightarrow Q$ という推論が、世間一般の常識、社会通念であって、 Q わけだハナイというのが、その、世間の人が思い込みがちな常識、考えかたを否定する意図に出ていることも多い。

3) わけにはいかない

自分が P と言ったから、聞き手が P ならば Q しなさい（ Q すべきだ／どうして Q しないのか？）という当為の判断が出てきて、その当為判断を否定する、というプロセスで用

¹ 筆者がまとめたものだが、内容自体は寺村（1984）での記述である。下線は筆者による。

いられる。

(寺村 1984 : 285-289 による)

否定形が3つあることは「ものだ」と「ことだ」と明らかに異なっているが、3つの形はすべてモダリティ助動詞としての「わけだ」の否定形とみなされるかどうかを検討する先行研究はあまり見つからない。

2.4 問題点の整理

以上の先行研究の概観から、モダリティ形式とみなされることのある「ものだ」「ことだ」「わけだ」は、その否定形についてあまり議論されていないようであることがわかる。それは、「現代の日本語がモダリティの文構造化（文法化）を完全に実現していないからである（安達 2014）。否定は、「ものだ」「ことだ」「わけだ」の内側にも外側にも現れうる。内側に現れる否定は、命題レベルであることは問題ないと考えられるが、外側に現れる否定は、命題レベルに帰属させるかモダリティのレベルに帰属させるかが疑問の余地がある。

以下では、主として、次の3つの点を検討する。

- a) 「ものだ」「ことだ」の否定形はそれぞれ「ものではない」「ことはない」とされているが、形態上どのように形成しているのか。また、「ないものだ」「ないことだ」も使用されるが、「ものではない」と「ないものだ」、「ことはない」と「ないことだ」には、いかなる相違点があるのだろうか。
- b) 先行研究に提示された「わけだ」に関わる否定形の3つは、すべて「わけだ」とどのように関係しているのか。三者とも「わけだ」の否定形と認められていいのか。
- c) モダリティ助動詞と認められることがある「ものだ」「ことだ」「わけだ」は、その否定形とどのような関係にあるのだろうか。

3. モダリティ助動詞としての「ものだ」「ことだ」「わけだ」の否定形について

以上の先行研究の概観から、「ものだ」の否定形ははっきりとしているが、「ことだ」と「わけだ」の否定形は議論の余地が残されているようである。

3.1 「ものではない」の形態的由来

モダリティ形式と認められる「ものだ」の否定形は「ものではない」とされている。「ものではない」の意味用法について、先行研究によって以下のようにまとめられる。

①動作主体が聞き手だとすれば、「ものではない」は当該事態の成立が望ましくないという話し手の見解を表し、常に不満を帯びている。これは「ものだ」が評価のモダリティ形式として使われる場合における〈当為〉の用法とペアになるといえる。また、「ものだ」の〈当為〉の用法と同様に、その直前でタ形が許されない。

(3) そう悪口を言うもんじゃない。(例(1)の再掲)

(4) 「そんな恰好で人前に立つものじゃないわ」と顔をそむけた。(BCCWJ)

(3) では「悪口を言う」という事態の成立が望ましくないことを表明するのに加え、「悪口を言うな」という禁止の意味あいも込められていると考えられる。「悪口を言った」という過去のできごとに不満をも表明する。一方で、(4)における「そんな恰好で人前に立つ」は望ましいことではないとの表出であるが、照れた様子でことばを発するとすれば、必ずしも非難と解釈されないとも考えられる。

②動作主体が話し手自身であれば、後悔の気持ちを表す。

(5) でその時にあ本当にできないって言うもんじゃないなという風に感じました。(例(2)の再掲)

「ものではない」は意味的に「ものだ」の〈当為〉と対になることがわかる。〈当為〉を表す「ものだ」はモダリティ形式と認定できるため、それとペアをなしている「ものではない」もモダリティ形式と認められるだろう。また、「ものではない」の形態的由来は、助動詞の「ものだ」の活用体系と関わりと考えられる。

「ものだ」の活用はすべて助動詞の「だ」に由来するものである。しかし、「だ」の活用を単に受け継いだままではなく、独自の活用体系を持つようになった。特に、「ものだ」の連体形は「ものだ」でなく「ものである」という点は興味深いところである。それは補充法により「ものである」という別系統の連体形から借りられたものであると考えられる。この点についての検討は別稿に譲るが、ここで「ものだ」の活用体系を挙げておきたい。

表1 助動詞「ものだ」の活用体系

語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	假定形	命令形
もの－	－で	－で	－だ	－である	－なら	－

「ものだ」の未然形である「もので」に「は」を介在させた上で否定辞の「ない」を後接させ

てできたのが、否定形の「ものではない」であると考えられる。これは形態上の一貫性である。また、話し手が「所与の事態の成立が望ましい」との態度を伝えるのか、「所与の事態の成立が望ましくない」を伝達するのかは、意味上互いに相反してまさにペアを成している。形態上も意味上もペアを組んでいるため、「ものではない」は「ものだ」の否定形であることに間違いはない。

3.2 「ことはない」と「ことだ」

モダリティ形式とみなされる「ことだ」の否定形について、寺村（1984）は「ことはない」とし、日本語記述文法研究会編（2003）は「ことはない」と「ないことだ」としている。いずれも「ことではない」とされていない。

〈最重要行為提示〉と〈感嘆〉の意味を表す場合、「ことだ」は意味・形態の両面においてモダリティ助動詞として認定できる。「ものだ」と同様に、活用はすべて助動詞の「だ」に由来するものである。ただ、「ものだ」のように活用体系が命令形のほか活用形がきちんと揃っているわけではなく、助動詞の「ことだ」は終止形しか持っていない。本稿ではそのような活用形の数が少ない助動詞を「活用形が揃っていない助動詞」とする。紙幅の関係で、ここでも「ことだ」の活用体系が構築されるまでの経緯を省くこととするが、とりあえず「ことだ」の活用体系を提示しておく。

表2 助動詞「ことだ」の活用体系

語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	假定形	命令形
こと－	—	—	－だ	—	—	—

助動詞の「ことだ」は終止形しか持っていない。仮に未然形があるとすれば、「ことで」が想定され、否定形は「ことで（は）ない」になる。筆者の考察の限り、「ことで（は）ない」にはモダリティに関わる〈最重要行為提示〉や〈感嘆〉などがまったく読み取れず、単なる「形式名詞「こと」＋コピュラの「だ」の未然形＋（副助詞「は」）＋否定辞「ない」との組み合わせである。先行研究で「ことだ」の否定形が「ことではない」とされない理由はそこにあると考えられる。助動詞の「ことだ」と形態的にペアになる否定形は存在しないことがわかった。

次は意味上から見てみよう。「ことだ」を〈聞き手のために、ある行為の実行が必要だ〉という話し手の判断を示すものとし、「ことはない」を〈聞き手のために、ある行為の実行が不必要だ〉という話し手の判断を示す表現とすれば、「ことだ」と「ことはない」は意味上ペアになるように見える。しかし、どうしてある行為が行為者にとって必要であるかを問うならば、〈行為者が、目的を達成したり悪い状況にとどまったり陥ったりしないため〉（高梨 2010：120）ということになる。それに対して、事態が未発生にせよ既実現にせよ、その事態が不必要なもので

あることを表すのが「ことはない」である²（日本語記述文法研究会編 2003：126）。そのため両者が意味上互いに相反して対をなすと主張するのは若干強引さが感じられる。「ことはない」の意味は「必要はない」と非常に近いと指摘されるが、「必要はない」と違って、規則、自然の法則を典型とする〈客観的不必要〉は表しにくく、基本的に〈話し手の発話時の評価〉を表す」（高梨 2010：143）という意味の違いがある。

- （6）一旦刑罰になると、現実は厳しいものだと思います。学生は退学に、社会人は懲戒免職（退職金でない）になります。見つからないと思っていても、犯罪は結構見つかるものです、だから、単なる好奇心でリスクを負う事はないといたいのです。

（BCCWJ）

- （7）ただ、持ち合わせがなかったら次に合算して払う事も出来たはずですので、持ち合わせについてはあまり気にする事はないかと思いますよ。

（BCCWJ）

規則が基盤となる例（6）と、ただ発話者の判断である例（7）は、いずれも「必要はない」と言い換えられる。「必要はない」は、〈話し手の発話時の評価〉と〈客観的不必要〉の両方を表すことができるが（高梨 2010：140）、〈客観的不必要〉を表すのに偏っており、〈話し手の発話時の評価〉は「ことはない」のようなほかの形式に委せていると考えられる。「ことはない」に先行する表現では、「心配する」や「気にする」など心を悩ます負のことばが多く観察される。

「ことだ」と「ことはない」とは形態上関連性が認められない上に、意味上の繋がり、特に相反関係も薄いように感じられる。そのため「ことはない」を助動詞の「ことだ」の否定形と認めず別のものとして捉えたい。

3.3 「わけだ」の否定形

寺村（1984）では、ムードの助動詞と認められるべき「わけだ」は、まず「わけ」を「理由」など普通の実質名詞で置き換えることができず、かつ、先行する部分（節）の表すあるまとまった叙述内容が、ある既定の事実からの当然の帰結であるとする話し手の見方を表すものであると述べられている。そのような「わけだ」は、モダリティ形式と認められることがあるものの、品詞性としては、やはり複合辞だとみなされることが多い。寺村（1984）では助動詞とされているが、そう判断する形態論的根拠は述べられていない。本稿では紙幅の関係でその部分も割

² 同じく動詞のル形に接続する「ことはない」という形で〈機会または可能性がない〉の意味を表す場合もある。当該事態の制御可能性によって意味が左右される。当該事態が制御不可能な場合は、〈機会・可能性なし〉の意味に限定される。当該事態が制御可能な場合、解釈は文脈に依存する（〈機会・可能性なし〉か〈不必要〉か、どちらに解釈されるのは文脈による）。（高梨 2010：143）

愛するが、コーパスを用いた考察により、「わけだ」は「ことだ」と同様に終止形しか持っていない「活用体系が揃っていない助動詞」であると結論づけた。その活用体系を表3に示しておく。

表3 助動詞「わけだ」の活用体系

語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	假定形	命令形
わけ-	—	—	-だ	—	—	—

寺村(1984)や日本語記述文法研究会編(2003)などでは、先行する文の内容をもとにして、論理的必然性のある帰結を提示したり把握したりすることを表す「わけだ」、論理性がやや低くなり、換言に近くなった「わけだ」、さらに論理性が希薄になり、その文の内容が確かに存在することを聞き手に示すような「わけだ」(日本語記述文法研究会編 2003: 208-209)、「理由」や「事情」など普通の実質名詞で置き換えられない「わけだ」は一括りにされ、すべてモダリティ形式だと判断される向きが見て取れる。しかし、論理的必然性のある帰結を提示したり把握したりする用法や、換言に近い使い方など、それらは「わけだ」の意味用法と言うより、形式名詞「わけ」にそもそもある用法であると言ったほうが適切だと考えられる。モダリティ形式と認められるのは、「わけだ」文は、先行する文の内容をもとに得た論理的必然性のある帰結であろうともなかろうとも、話し手が論理的な繋がりがあると思い込み、聞き手に伝えようとする場合の「わけだ」のみであると考えられる。

仮に未然形があるとすれば、「わけで」が想定され、否定形は「わけで(は)ない」になる。ちょうど先行研究で言及されている3つの否定形のうちの1つである。しかし、筆者の考察によると、状況や先行文脈を根拠として、聞き手が推論によって導き出した帰結、聞き手や一般の人々が導き出すと予想される帰結を否定するときに用いられる(日本語記述文法研究会編 2003: 213)「ことで(は)ない」は、モダリティ形式と認められるときの「わけだ」の上記の意味と、あまり関わらないと考えられる。そのように判断した上で、助動詞の「わけだ」には未然形がないこととした。このように、先行研究で「わけだ」の否定形と認定されてきた「わけで(は)ない」は、実際にはペアをなす否定形とみなすことはできないが、形態的に関わっていない「わけが(は)ない」と「わけにはいかない」も、当然ながら「わけだ」の否定形と認めることはできない。

4. 否定表現のさまざま

本節では、形態的分析および意味的分析から、モダリティ助動詞である「ものだ」「ことだ」「わけだ」に関する否定表現の対照分析を行なう。

4.1 「ものではない」と「ないものだ」

前節では、モダリティ形式と認められる「ものだ」の否定形は「ものではない」であることが形態的にも意味的にも判明した。それに対して、否定を含む「ないものだ」という表現もある。2つの形式にはどのような相違点があるのか、本節で考察していく。なお、「ものではない」は「ものだ」と同じく、形式名詞の用法があるものの、ここでは検討対象としない。

- (8) まーとにかく酷い演奏でした。こんな酷い演奏なんて聞かされた方はたまったもん
じゃないと思うんですけど。(CSJ)

二者の相違点に言及した先行研究が限られている。ここでは日本語記述文法研究会編(2003)より関連した内容をまとめて提示する。

「ものではない」と「ないものだ」との相違点：

共通点：その行為が望ましくないことを示す。

相違点：①「ないものだ」「ものだ」は「Xは」を伴うが、「ものではない」は「Xは」を伴わなくてもよい。

②「ものではない」は、聞き手が実行した行為に不満を表明し、非難する際に用いられやすい。

「ないものだ」「ものだ」が「Xは」を伴うことについて、「ものだ」は確かに「Xは」を伴うことが多いものの、「Xは」を伴わないと文が成立しないとは言い切れない。夕立に降られてびしょびしょになったとき、濡れた髪をタオルで拭きながら独り言で「ラベンダー畑なんかに寄らず、早く帰るもんだな」というのは文法的である。「ないものだ」は「ものだ」に先行する動詞に否定辞がつき、「ものだ」が相変わらず〈当為〉を表す。ちょうど両親が喧嘩した場面を目撃したとき独り言で「??? そう早く帰らないもんだ」と言うのは多少不自然さが感じられるが文法的には適格だろう。「ないものだ」は「ものだ」と同様に、「Xは」を伴うとき、「X」が総称的な一般名詞であれば受容性が高まる(=例(11), 例(12))。「男の子は泣かないもんだ」は、話し手が認識した男の子としての〈一般性〉を述べる文と解釈されるし、「泣かないで」のように泣いている男の子への軽い命令とも解されることもある。「男の子は泣くもんじゃない」はただ一本の解釈で、男の子である相手に「泣くな」の命令を出すのみである。もちろん、「男の子なのに、なんでそんなに泣くの?」のように、話し手がイライラして相手が泣いている様子に不満を表明する気持ちも出やすい。「男の子は泣かないもんだ」にも不満の表明が読み取れるが、「男の子は泣くもんじゃない」に比べると程度は低く感じられる。

それでは、「ないものだ」と「ものではない」とは自由に置き換えられるのだろうか。先行研

究において「ものではない」は、「動作主体が話し手自身であれば、後悔の気持ちを表す」と述べられている（＝例（13a））。〈当為〉を表す「ものだ」は、話し手が自分の認識していることを伝えることで、聞き手に同様の行動を促すという、聞き手への行為要求である。自分への行為要求は、「ものだ」を使わずに「したほうがいい」や「すればよかった」などのほうがより自然である。よって、相手が悪口を言ったことに対して、「そう悪口を言うもんじゃない」と「そう悪口を言わないもんだ」はいずれも可能である。一方、「自分がその時本当にできないって言わなければよかったなあ、私もこんな輝かしい存在になるはずだ／自分がその時本当にできないって言わなくてよかった、そのおかげで今はうまくいっている」という話し手自身の過去のことについて述べる場合、「ないものだ」の受容度が低くなると考えられる。

また、「ものだ」文が「所与の事態の成立が望ましい」を表すのに対して、「ないものだ」文は「所与の事態の不成立が望ましい」を表す。表現を言い換えれば、「ものではない」が表す「所与の事態の成立が望ましくない」とほぼ同じような意味を表すと考えられる。ただ、「ないものだ」における「ない」は、先行する動詞に否定の意味を加え、先行する文と一緒に「ものだ」に包み込まれる。一方、「ものではない」は、「ものだ」文全体が「ない」によって否定される。

- (9) 学生は勉強するものだ。
- (10) 早く帰るものだ。
- (11) 男の子は泣かないもんだ／泣くもんじゃない。
- (12) a. そう悪口を言うもんじゃない。 (例（1）の再掲)
- b. そう悪口を言わないもんだ。
- c. ??? そう悪口は言わないもんだ。
- (13) a. でその時にあ本当にできないって言うもんじゃないなという風に感じました。 (例（2）の再掲)
- b. ??? でその時にあ本当にできないって言わないもんだなという風に感じました。

聞き手に対する行為要求について、「ないものだ」と「ものではない」とはいずれも使用可能である一方、自分の過去の行為についての後悔のような気持ちに関しては、「ものではない」のほうがより自然な表現であると以上の検討によってわかるだろう。いずれも主題を伴わなくてもいい。

さらに、「ものではない」は「ものだ+(の)ではないか」という構成で用いられることもある。

- (14) 結婚するときなんて、男性のほうも一生懸命になって、「なんでもやります」くらいのことは言うものじゃないですか。 (BCCWJ)

(14)における「ものじゃない」は形式名詞の用法でもなく、助動詞「ものだ」の否定形「ものではない」の用法でもない。「なんでもやります」くらいのことは言う[ものだ][ものではないですか]」という区切れである。意味上も両者の結合で、助動詞の「ものだ」が表す〈当為〉に関わる個人の主張を和らげて提示するのである。

4.2 「ことはない」と「ないことだ」

第3節からわかるように、モダリティ助動詞としての「ことだ」の否定形は、「ことで（は）ない」になるわけであるが、実際に使われている「ことで（は）ない」は、助動詞と認められる「ことだ」と関係せず、ただ形式名詞の「こと」にコピュラの「だ」の未然形が後接し、さらに否定辞が付くことでできた形式である。「ことだ」に関する先行研究でよく言及された「ことはない」は形態上も意味上も「ことだ」の否定形ではなく別のものである。「ことだ」と意味的に対立しているのは「ないことだ」である。

- (15) a. 完食すること（だ）。
b. 完食することはない。
c. 完食しないことだ。

学校の食堂では(15a)が現れ得る。提供された食事をすべて食べ切るように、という学生への弱い命令を帯びていることばである。一方、(15b)は文法上適格であるが、実際の会話では情報が足りないため、そのままでの使用はあまりしない。「これ以上食べられないみたいだね。もう完食することはない。」や「風邪治った？食欲がなければ、完食することはないよ。」など、具体的な場面においてある事態を遂げる必要性がないと述べるときに使われる。(15c)も前後の文脈が要求される。「アレルギーを起こしやすいから、完食しないことだ。」や「食べ過ぎると体を壊すから、完食しないことだ。」のような文がより自然である。食事をするとき、残さずに食べ切るのは皆に共通している知識で、前後する文脈がなくとも理解できる。それに対して、(15b)(15c)は、実際の場面と心に内蔵している世界知識とズレが出るため、理解に妨げにならないように情報の追加が要求される。お湯が使える場所に「熱湯を長時間流さないこと」も(10a)と同じく世界知識と一致しているため短いことばでも通じる。

「する」か「しない」かという点で、意味上「ないことだ」は「ことだ」の否定形式になりうる。いずれも〈行為者が、目的を達成したり悪い状況にとどまったり陥ったりしないため〉という意図を前提にして発する表現である。「ないことだ」における「ない」はそれに先行する文全体を否定するわけではなく、否定のスコープは直前にある動詞に限る。そのため文構造としては、「[熱湯を長時間流さ]ないこと」ではなく「[熱湯を長時間流さない] こと」である。意味上「ないことだ」と「ことだ」はペアになるにもかかわらず、形態上の関連性と一貫性が欠

けているため、「ないことだ」も「ことだ」の否定形と認めずにただ否定を含む形式とする。

4.3 「わけだ」と「わけではない」「ないわけだ」

「わけではない」は、状況や先行文脈を根拠として、聞き手や一般の人々が導き出すと予想される推測を否定するときに用いられる（日本語記述文法研究会編 2003:213）。また、その場合、世間の人が思い込みがちな常識や社会通念を否定する意図が込められている（寺村 1984:288）。この意味解釈では、「わけではない」は話し手の心的態度を表すモダリティ表現になりうる。しかし、前述のとおり、意味上「わけだ」とペアになっていないため、本稿では「わけではない」をモダリティ助動詞の「わけだ」の否定形としない。

その否定のスコープには全部否定（＝例（16））もあれば部分否定（＝例（17））もある。（16）は、読み方が決まっていることを全部否定するのに対して、（17）は、数量を表す副詞「すべて」があるため、薬が効く人もいるし、効かない人もいるという意味になり、「わけではない」が部分否定になる。「というわけではない」も同様に、部分否定も可能である（＝例（18））。（19）は、主題が固有名詞で、例（16）～例（18）のように世間一般の常識を否定しているわけではなく、「風野」個人の思惟が社会通念と異なっていることを示す。

- （16） どう読まなければいけないか決まっているわけではないのね。だまって読んだほうが心にしみるっていう人がいても、もちろんかまわない。 (BCCWJ)
- （17） ただし、すべての人が効くという保障はないのです。民間療法には。薬がすべての人に効く訳ではないので。 (BCCWJ)
- （18） アメリカに住めば、英語がペラペラになるというわけではない。
- （19） 正直いって、風野は特別、子供が欲しいとか、つくりたいと思ってつくったわけではない。三十近くなったので、世間一般にならって結婚をし、しばらく一緒にいたら子供ができた。 (BCCWJ)

「わけではない」の前にもう1つの否定辞が来て、「ないわけではない」という二重否定文を形成する複合形式がある。「エンジン故障はもちろんない」であれば、エンジン故障は100%ないという、エンジン故障についての完全な否定になる。「ない」に「わけではない」を後続させれば、「エンジン故障はもちろんない」を否定することになる。エンジン故障は100%ないという保証がなくなり、生じる可能性が含意される。しかし、100%の確率でエンジン故障になるということも言えないから、「ないわけではない」は部分否定で、絶対的な解釈にならないのである。

- （20） エンジン故障はもちろんないわけではないが、めったに起こるものではない。

(BCCWJ)

「わけだ」には「ものだ」「ことだ」のように形態的に対応する否定形はないにもかかわらず、モダリティ形式と認められ、意味的にペアをなす形式がある。それは「ないわけだ」である。

- (21) 房子の涙を見ても込み上げてくる怒りと苛立ちを矢崎は抑えることができなかった。「どうしてそんなことを言うの？」矢崎は溢れ出す感情に押し流されて、声を荒げていた。「そんなことできる訳ないじゃないか。毎日ここに来ているのに、どうしてそんなことを言うの？ 僕が来ても何の役にも立たない訳だ。」 (BCCWJ)

「ないわけだ」は、「ない」が「わけだ」というモダリティ形式に包み込まれ、助動詞の「わけだ」と意味的に対になるが、形態上は助動詞の「わけだ」の活用形に由来するものではないため、ただ否定を含む形式とする。

上記の分析を簡単にまとめると、以下のようになる。

表 4 三者間の相違点

分類 \ 形式	ものだ		ことだ			わけだ	
	ものではない	ないものだ	ことはない	ことで(は)ない	ないことだ	わけではない	ないわけだ
形態上	○	×	×	○	×	○	×
意味上	○	○	×	×	○	×	○
否定の種類	モダリティレベル	命題レベル	モダリティレベル	命題レベル	命題レベル	モダリティレベル	命題レベル

5. おわりに

本稿は、モダリティ助動詞の「ものだ」「ことだ」「わけだ」の否定表現を対象とし、その否定形を明らかにし、否定形として認定する基準について検討を試みた。「ないものだ」「ないことだ」「ないわけだ」が表す意味、またそれぞれの否定形と、肯定形と意味的にペアをなす「ないものだ」「ないことだ」「ないわけだ」との関係も判明した。

「ことで(は)ない」と「わけではない」とは意味上それぞれ助動詞の「ことだ」「わけだ」と対応していないため、形態的に「ことだ」「わけだ」の未然形だと想定されうるとしても、否定形とみなすことはできない。助動詞の「ものだ」には否定形も否定を含む形式も揃っている一方、「ことだ」と「わけだ」には否定を含む形式のみある。それは「もの」が「こと」と「わ

け」より文法化が進んでいるからと言えるだろう。

(ちょう りきたん・言語科学研究室)

参考文献

- 安達太郎 (2014) 「否定・疑問とモダリティ」澤田治美 (編) 『ひつじ意味論講座3 モダリティⅠ：理論と方法』 p.99-117, ひつじ書房.
- 高梨信乃 (2010) 『評価のモダリティ：現代日本語における記述的研究』 くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法4 第8部モダリティ』 くろしお出版.
- 益岡隆志 (2000) 「価値判断を表す「ものだ」と「ことだ」」『日本語文法の諸相』 p.123-134, くろしお出版.